

三圖七高僧傳圖會

附錄之卷

六



布日厚
柳本氏

三國七高僧傳圖會附錄之卷目錄

聖德太子傳

第一 厩戶皇子降誕靈瑞並幼稚奇異

第二 蝦夷寇東鄙並魁帥綾糟感恩歸款

任那再興太子議論並秦河勝之傳

第三 河勝奏日羅素姓並吉備羽嶋渡百濟

日羅來朝謁太子並太子觀日羅相示劍難

第四 日羅密奏良策並德爾余奴刺日羅

日羅怨靈覆息率參官等船

九曜文庫

第五 用明帝即審位並勅召沙門豐國

佛法渡本朝來登並佛法興廢歷代

第六 物部守屋企叛逆並主上崩御

守屋與官軍戰淡河並守屋大連滅亡

第八 本朝女帝根政之權輿並太子經營四院

第九 太子定冠位十二階並憲法制十七條

帝請太子講勝鬘經並太子諸別為凶年之備

太子薨斑鳩宮並葬科長御墓

驪馬悲鳴斃異鳥棲廟上守墓

慧慈與太子全日逝

皇太子廟內碑石湯

碼碯石識文

人王卅四代推古天皇三年乙卯三月土佐國の海に
 沈水香木漂し海人よりく之を獻じ
 大に圖計長八尺三寸勅して
 觀音菩薩の像と彫刻し
 同九年辛酉十月奉河國より
 鳳尾三枚と獻じ長一丈余
 かつく嘉瑞とす
 同十二年甲子正月越の國より
 白鹿角の枝十七岐
 あり奉じ
 吉瑞とす



三國七高僧傳圖會附錄之卷

杓杞菴一禪居士編輯

○聖德皇太子傳

抑聖德皇太子と申奉る人皇卅二代用明天皇
 第一の皇子なり。母の穴穂部間人白皇太后
 天皇卅二年辛卯と。一夜间人后靈夢と見り其容の金色の沙門忽然と
 て現れ告て云く我を世と救ふ願あり。故にをかくる。後の胎内と假下。后太子
 驚き何人ぞまゝぬれやと問う。我は是救世菩薩なり。家ハ西方に有る。但
 妻の身の垢穢をぞ貴人と宿し奉らんや。沙門のまゝ我更不穢と厭は。但
 衆生と濟度せんを欲ふのと言已く。後の口より飛入たまふ。御夢を
 即ち夫より娠まひ八月と歴く胎内にて言聲外に聞ふ。余後敏達
 天皇即位元年壬辰正月元日。后ははらへるを快くや。やう。許す乃

聖德皇太子之御像

皇太子有多名依
所生處故曰厩戶
用明帝愛之居上
宮故曰上宮八人
奏事一時善聽故
曰八耳又曰耳聰
或豐聰耳睿明仁
恕故曰聖德弘興
佛法故曰法大王
又曰法王



三國七高僧傳卷六

舍人調子磨

太子策驪馬騰空
三日乃降語人曰
我與雲霧直登富
士嶽遂東至陸奥
復北逾信濃歷三
越而還云々



三國七高僧傳卷六

女孺と共小宮中と巡り遊覧しつゝ、栢く厩の下ふりて、せやふ忽此地了
 おつゝ産の氣つきたり、寢殿みつせうへ隙をく其処へ即ち御安産あり、
 け聊の御惱し、誠小御夢の覚なき如く、女孺の後周章うらた、御誕生乃
 皇子と抱取、又后と女抱し奉り、寢殿み入らうせらる。此小宮中、陽也
 うつ用明天皇此死、未だ皇子まく渡らせし、橘豊日尊と栢と御産平小
 やとせり、聞かれ既産殿の邊み入らうせらる。后の殿中と敷覧あり、小
 赤黄の光殿行と照し、吳香宮中み薫し、れは大小異、左右の侍臣み對ひ
 宣い、此兒尋常の傳あり、とて下湯沐、子ぐし、先湯と引せ奉り、
 當今敏達天皇も、殊更慮うらう、御寵愛、うらうし、物悲此御子
 御身香潔、殿中みられ、恰も栢檀の林み入ら如く、又抱奉り、所の宮女、その
 白い自ら身やけり、日と重ぬ、とて香氣散、宮女な、い、詳い、とて奉り
 しく、又厩下りて降誕し、故御名と厩戸の皇子と稱し奉り、然も、小正月中旬

讚岐國より表と捧げ、一の靈より瓢と献る群臣、参内して其奏する所と聞、小同國羽
 香郡小縣主物部巨磨と、よのあり、彼園み一株の椿あり、其下み忽然と一瓢の蔓
 生じ、次第小長じて花咲ふ、一の葶ろ、二ふり、里俗、太く奇、い、うらうと、やんと
 評し、間、一の瓢と結び、其形大、く壺に似たり、諸人、ま、く奇、見、所、小
 瓢の腹、み人の形、幾許もあら、れ、其上、み文字あり、是其人の名あり、又、其余、小、奈の
 字あり、圖、よ、い、文字、よ、い、一段、高く、文字の勢、い、人物の、妙、く、た、と、うらう、名、筆、名、画
 といふも、及ぶ、所、み非、を、國中、此、と、傳、へ、見る者、市、と、うらう、時、み、一、つ、の、神、地、其
 長、と、六、尺、く、うらう、現、も、来、う、て、彼、蔓、と、繞、ひ、て、瓢、と、守、り、人、と、蔓、み、迫、づ、け、と、見、る
 といふ、是、と、畏、れ、敢、て、迫、る、者、く、冬、み、至、と、と、瓢、の、蔓、枯、と、青、々、と、一、葉、も、落
 し、く、雪、積、れ、と、少、く、と、凋、ま、び、曾、て、其、地、も、去、り、か、其、折、く、小、兄、登、が、家
 小、牝、馬、あり、孕、ひ、し、十二、月、み、して、師、走、十五、日、み、子、産、り、此、駒、の、形、尋、常、み、か、り、
 頭、へ、龍、の、と、く、背、み、鱗、甲、と、生、じ、生、れ、く、乳、の、ま、び、園、み、出、く、彼、瓢、の、葉、と、食

始のやどい蔓の本の葉とくく。後小蔓の末葉まで喰い盡とふじうて。神地ハ飄
 と譲りて飛りぬ。諸人そくく。吳ひ所ふ。當年正月朔日ハ彼駒飄の蔓と啖り
 一馬口家小啞(歸)て之と置。忽空中小昇て。雲とくんで飛去。早ぬ。あやう。
 奇性の義ふくく。叡覽ふくく。奉る。奏。天皇ハ群卿奇代
 の珍事。うりて。指て件の飄と叡覽あふ。人物の圖文字のい。あひて。ま。ま。
 妙なり。天皇宣く。朕はくく。紫。是月朔日既ハの皇子誕生の形勢
 前代未聞のこ共なり。是の子の生む。靈瑞。あて。有。急。これと
 皇子小見せ。と勅。侍者ハ飄と携。皇子の御殿。い。そ。ろ
 飄と奉。誕生の後。廿ヨも及び。襪。襪の中。み。り。ん。ん。
 御嬬母飄の蔓とくく。御手の。奇。皇子降誕の其日。曾。く
 左右の御手と。御父豊日尊と始奉。心。坐。今日飄と奉。ふ
 だんて。莞示と笑。襪。襪の中。右の午と出。蔓と手。採。ん。こ。こ。

な。此時右の手自然と。御手の中。飄の種一粒。落。傍の人々ハ
 如何と。其。飄の蔓。手。引。奇。靈の
 飄の僅小嬰兒の力。引。坐。離。既。飄の頭。蔓の付。所。う
 蓋の如く。或ハ杯の。破。離。靈。中。一團の飄。飄。め。け。出。群。臣。是
 と破。見。一。種。の。脱。出。跡。あり。只。今。皇子の掌。の中。出。給。ひ。
 仁。其。蹟。納。見。更。毫。末。の。差。扱。此。飄。の。仁。儼。然
 乃。今。既。右。の。御。手。ハ。披。猶。左。の。御。手。ハ。群。臣。を。く
 奇。正。く。聖。人。降。誕。の。奇。瑞。乾。圖。と。握。て。生。こ。れ。ら。の。事。と。や
 言。此。飄。後。の。世。又。賢。聖。の。稱。大。和。國。法。隆。寺。ハ
 九人の。綺。里。季。夏。黃。帝。舟。里。先生。等。

同年首夏。皇子僅小四月。詔言。人事。と。曉。群。臣。皆。恐。敬。ふ
 翌二年癸巳。皇子二歳。二月十五日。佛涅槃。日。當。て。掌。と。合。て。東。向。ひ

南無佛と云々。此の右の御手抄に云々。舍利一粒掌心より出たり其方ニ菽粒の如し
今尚法隆寺に有て什室に 皇子五歳あるを時より。文筆の書法を学ひけり。一ハ筆を揮ひ
 自然ニ筆法備り。又諸の博士に經典を習せ奉る。一同教のせむ
 復といかざる。記憶したまひ。示も其義理よく識る。故に之を心と云
 者。七歳あるを時奏して曰く。毎月六齋日。諸天國の政吏と檢察と
 乞願ふ天下して。殺生とせしと停止せらんと。帝よろしく聞召し。是と制し
 けり。天皇十年辛丑の。皇子十歳あるを。聰明日々益し。月みまひ
 一とらて万と悟りたまふ。春二月蝦夷の國人共反り。既ニ東國の界所々乃
 地と侵し。劫り寇らんと支甚し。邊境の早馬敷浪と打く。朝廷に注進せり
 蝦夷の地ハ本朝陸奥國より。東北の方ありける。海中の島あり。此國人鼻の
 下の鬚長く。蝦より魚の状に似る。えみと言て。ハ詞の助なり。又
 蝦夷も昔ハ蝦と魚の状に似る。後世より蝦と誤り稱るもの。是より

蝦夷國も昔ハ蝦と魚の状に似る。夫と後より蝦と唱へ。又誤りて蝦と云ふ
 諸此國ハ皇國と海と隔て二種の夷地ありて其性も。旁悍なり。元土地ハ
 五穀と生じ。元北方の寒國なり。北方舟カ國に近く。又カトト通せん
 程ハ秋の半より冷氣はく。嚴寒ハ指と落とす。故に五穀登
 げ國人穴と穿つ。其中ハ栖る。鳥獸魚鼈の肉と食し。鳥獸
 の毛を以て衣せり。今ハあつと木の皮を以て衣せり。親子兄弟と別は交合し。
 又諸の鳥獸と。小弓と以て射る。其鋒ハ毒薬とつて射る。竹
 鐵ハ毒薬甚し。熊の毒。然るハ上古より皇國ハ敵ハ十二代の聖王
 景行天皇の御宇ハ既ニ陸奥常陸の邊まで侵し。そのれハ國ハ班たり。ハ
 其の首將なる島津神國津神とらる者。と擣り。なまひる。夫より降参して
 皇國ハ伏せり。猶時々の蜂起し。陸奥出羽ハ攻入邊界を侵せり

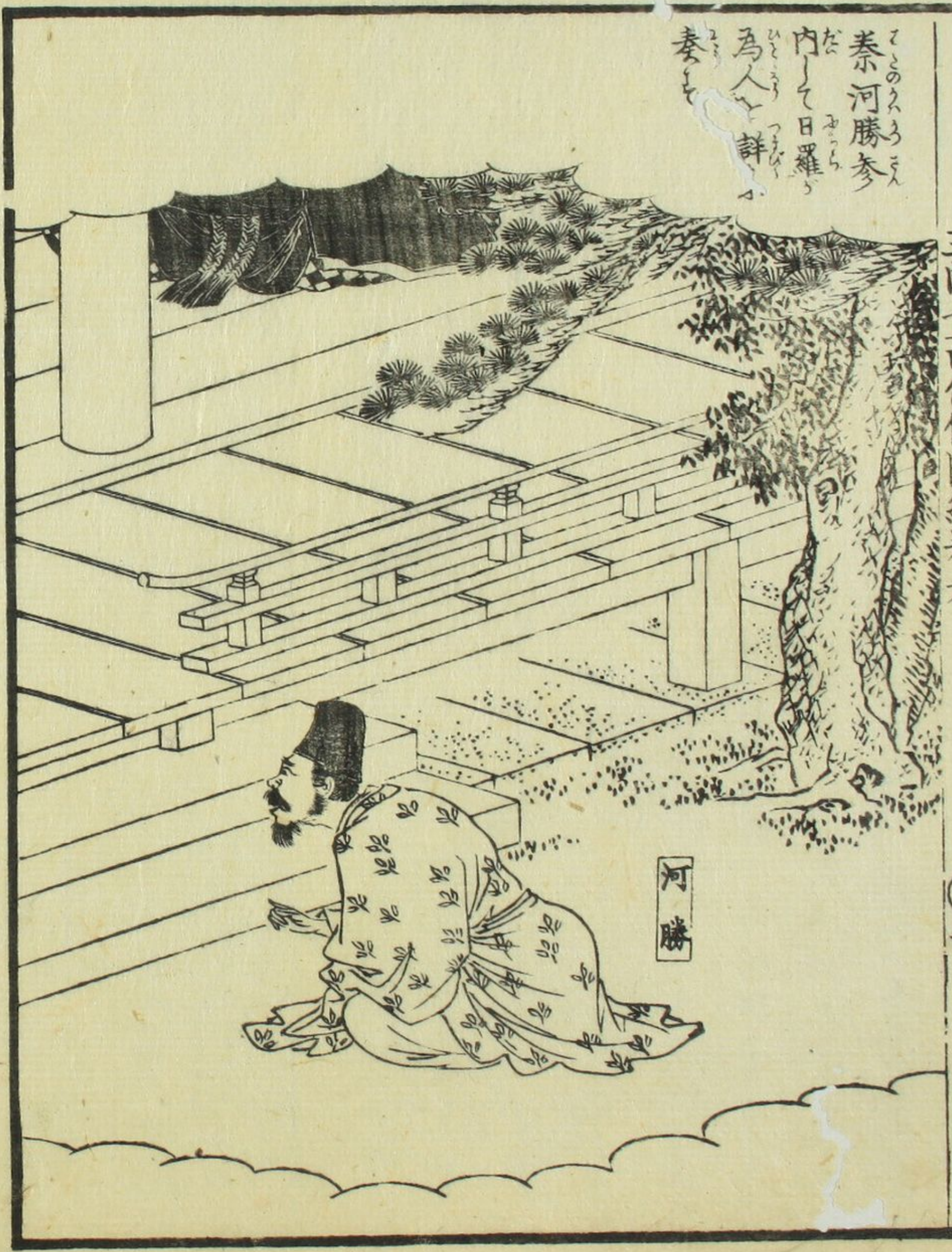
備も蝦夷の逆乱注進せしむ。朝廷は群卿こしく朝参あつて皆一統を奏し
 ういづる。蝦夷ひしう稍もそれ王化ふ及ぶ。邊鄙の地と侵ると安んじ速
 り朱鷺と加つれ然るべしと申されし。鹿戸の皇子耳とて聞けり。天皇
 天皇ありし奏し給ひり。小児の身とて國の大事と議せんと恐る。似
 たりとて。若天兵と下る。僅ふ千人三千人の首を断られ首首の五十人
 七十人と召捕れ一端ハ降参りてぐれども。年と経てハ又起る。有べし
 り。深く敵地ハ入る。蝦夷の種類と盡さる。不仁。兒意とりて
 思ふ。如何も。大毛人。一兩人と召と教諭と加へ重し盟と立せて
 後本國ハ放ちて。重く禄と賜る。心ハ伏せ。永く背く。復候ふ。まじ。
 万一召して参らざる。時ハ誅と加へらる。遅らざると奏し。天皇甚
 歡感。頻て官兵と蝦夷。下る。大毛人。綾糟と帝都ハ召れ。詔と下して宣ひ
 なる。往昔大足彦天皇景行帝の御代の如く。你ハ國とて。王化ハ属せらる。誅と

加へし殺とて。殺し殺し。赦とて。赦し。其時永く背き奉る。たれし
 盟とて。其後稍も。朝廷ハ背く。今ハ前例あり。首と切り。し
 と有れば。綾糟大ハ恐と若命と助け。放ち返す。水と浴。三諸
 奉らば。申し。此旨許容あり。渠此時泊瀬の川乃中流。於て水と浴。三諸
 岳の方ハひし。口瀬と盟とて。曰く。自今子々孫々。若天皇ハ背奉る。し
 あ。天地の諸神。吾蝦夷の夷種と盡し。頭とたれ。盟と斯て。綾糟
 多くの禄と賜とて。本國ハ。是。後ハ蝦夷。永く背く。あ。し
 とう。誠ハ皇子の聖智と。れ。官兵と動。劔戟血と。滯ら。あ。よ
 べ。僅ハ一言の芳思ハ。又十歳。年。二月。平日。皇子の
 御侍。童子等。廿六人。一日。後園。於て。戯。試。小。左
 の方。十二人。と。右の方。十二人。と。両陣。合。廿四人。の。童。女。ハ。汝。ハ
 声。と。香。と。銘。ハ。思。ハ。所。と。宣。ハ。廿四人。一。同。ハ。声。と。長。く。

短く。心々思々ありの戯言。ある國家の政事。又經典の中亦有し其難問
 一奉る不詳不聞や分られ。彼より所の如此。是が問所の斯ごとく尋る所不
 對し。とてふ。一以毫末と誤るる。童子とて大に驚歎し。家不歸。其
 其父母不語。敢て實とせば。日々ふさぬの難問と作て問ひし。子
 叙とてつく分るが如く。火と滞り。條理明白なり。諸人よく驚き誠不
 神不通りなる皇子ふと世の人これより豊聡耳の皇子とて又耳聡聖德皇
 子とも申せし。敏達天皇十二年癸卯とあり。西蕃の諸國平ふとあり。
 急と告る事もあつる。ちち先帝欽明山崩御の際のぞと當今聖主敏達不
 對し仰置とる。夫任那國の往昔御間城入彦天皇人皇代崇神の御代より代々
 朝廷は忠と信と一度と背くことありと。新羅の嗣と絶し今あての百
 濟高麗と新羅のたふ勢と挫げ。新羅は威と振へ。朕ももして新羅の
 切らる任那の地と取へ。任那王の子孫とあり。其末と與さんと思ひし。

いと果てて身没し今この恨を。皇子天位と踐て後。一たび任那と與し
 う之努遺誠と忘るるをふれと宣ひ終つて山崩御のゆひの當今踐祚
 あり。年々此と仰出されしも何とて春秋より更とて既十二年
 と成り。今年春二月。ある日諸王及び群臣とられ仰出されり。朕
 不徳とて。先帝の慈とて。喜信不昇。常ふ皇考の恩と報
 奉らるることを。ふ崩御のぞんで。任那の遺裔と興へし。を
 懇不遺詔と蒙るる。誅罰の弊と顧て今年ふと。朕つる
 計略とて。新羅と亡し任那とたてん。卿等とて思ふ所と
 及して議論とて。勅問ありと。諸王群臣とて。口とて。んて
 一言。此と。麻尸皇子當年十二歳はわ帝の側あり。く
 らん。天皇皇子と願ふ。汝幼推し。才機凡夫あり。事
 此事の思ふと宣ひし。皇子袖と合せ。謹で奏したまひし。

秦河勝参
内して日羅
為人の詳
奏



三國七高作傳圖卷之九

良盤

人皇三十三代欽明
天皇の御宇ハ
都と大和國金
刺の宮小遷り
三十三代敏達天皇
の御宇ハ同國
譯語田幸玉宮又
磐余池辺雙槻
の宮小遷り



三國七高作傳圖卷之九

良盤

臣初年しんねんよりえん不敏ふみんなり。如何いかんして斯このの如ごとき御大事おんだいじを預あづかり申まをす。然しかん
 して黙もくして思おもふ所ところと奏そうせしむるに却かへて怒おこりあり。先まづ此この一義いつぎと度たへん御更おんさら
 るに賢才良智の臣と召よされ其計畧そのけいりやくを従したがひて宣のたまはるに臣わが承うける
 今百濟國の達卒日羅たつそつにっら 達卒の官名位三品 みづから日羅の名 その者なり。才智諸人さいちしよじんを勝かれ兵と
 用もちふと玄妙不測の業えんめうふそくなり。武勇も世よに秀ひでてつと承うけるに此このの如ごときと
 勅問ありて宣のたまはるに此このと臣わが父の尊このの高祖の天皇の在あり坐ませし時とき常つねに
 御側おんがわに侍まをりて秦河勝と名なる臣わがなり。渠かれ日羅と名なるを知らず。河勝と召よれ
 て其人このひとと為なりて聞きく召よさるべしと奏そうす。即すなはち河勝を朝廷てうていに召よさるなり
 秦河勝の其父祖詳そのちちそるに欽明天皇二十三年壬午の歲秋七月廿丙子。天
 皇の御夢おんゆめに一人の神人かみんの狀かたち天子の儀ぎを表あらわす。北面きつめんして天子と拜まをす。我われは是こゝれ秦の政
 皇帝てんていなり。我われ常つねに大日本國と名なるを願ねがふ。天皇の室國むろくにに來きて皇帝の臣
 とらり國家の為ために忠ちゆうと名なるべし。我われ一人の臣わがなり其名斯大臣と申まをは彼かれ先達せんたつて

此地このちに來きりて今天皇の寵臣馬子の宿祢しゆくねと名なるを申まを終はるに御夢おんゆめに
 聖朝せいぢゆうに至いたりて博士と召よさる。秦の政皇帝其臣そのちんに斯大臣と名なる者あり。秦
 詳しやうを考かんふと勅命あり博士謹きんんで奏そうす。政皇帝と言いは侍まをらば然しかんとは秦
 人の之このに熟考じやくかんす。秦の始皇帝と名なる。始皇帝の諱かたなを政と申まをす大臣ハ
 李斯と名なる人あり此人このひと楷書と作なす。夫これして是こゝるべしと申まをは。天白王始てんぱくおうして
 悟さとりて其その甚こゝろに怪あやしむる事ことを思おもひ召よさる。此この日ひより大雨降ありて篠しのと投なげ
 異ことなるべし七日の間歩ありも止とどまらぬ。是こゝれ依より洪水漲なり出て八日やちより一ひと
 雨ありて。此時泊瀬川このときしやくせがわにびたり水溢みづあり。三諸の丘の麓ふもと大山崩おほやまり。忽然とつぜんとして
 崩くづれり地ちより一の大甕おほのかづを引出ひき三輪の社の廣前ひろまへにありて止とどまる。村民等
 是こゝれ見み附つり群集ぐんしゆと見みる。口くちより甕かづなり。此この怪あやしむる甕かづを傾かたけ伺うかがひて
 甕かづの裏うらに嬰兒えいぎの泣なき聲こゑをきく。諸人しよじん驚おどりて皆みな甕かづを捨すて逃にげり。天皇
 やがて天聽てんていに達たつし速すみに携かり來きりて勅ちゆうありて甕かづを階下かひに奉たる。天皇

最前不靈告と感し給ひてより既九日あり有司不課せうの瘡と破く
 獻覽あり一個の男子あり出たり其容端正して面ハ素玉のごとく
 群臣もかく怪まばばいさかしく此天皇夢中の奇異と語らせり是彼
 政帝もんとて養育を加ふし則姓を秦とせり。河より出る理を以て
 河勝と名附たまふ成長ふまふ才智俊敏して世に勝と誠希代の智
 臣たり。後小欽明天皇この河勝とて厩戸皇子の御父用明天皇不附
 せり。余後厩戸皇子不從ひ奉りて云々

新撰姓氏錄に秦始皇帝三世ふありて孝武王と入り。其子功満王と
 して者仲哀天皇の八年小我國の化とて来り此時功満王不附後に来り氏
 二十七縣の人其數もろもろ夥し。是等の者金銀帛玉の類いと献り皇國
 ふにまき。此輩蠶と養ひ絹と織し其の速る法と教むるあり。仁徳天皇の
 御宇ふありて彼等と諸郡ふ分ち置けり。然る後綿絹の類と夥し

帝不献あり綿絹に能人の肌膚暖しるものればとて其功と賞たまひ。
 功満王の裔小波多とて姓と賜けぬ。是ありて秦の字もくく訓ありや
 秦氏太秦氏ふ同姓して河勝も其裔の如く聞ゆと云々

又聖徳太子の秦の河勝が怪生して十一歳あり年誕生しゆい。十二歳小
 くと又太子の側と離奉らば其上太子降誕の時ふのそ。讚岐國兄磨が家
 一説に河勝大甕の中より怪生やると恐らく偽説なり。此より先秦漢が
 三韓の人時々来朝して皇國ふとて住らるるあり。秦氏漢氏百濟氏
 等より人王廿二代雄略天皇十五年秦の酒公小姓と賜つて宇都麻佐と
 して蓋秦の河勝も亦其秦氏の苗裔なり乎河勝性質敏悟ありて異域の
 舞樂と習得せり。聖徳太子不從つて和学と作る。凡衆家者流河勝と

祖そと又また一書ひと小河勝こがかつ後終のち自らみづか小船ふね小乘りやく西海さいかい小泛うら播摩はりまの浦うら者ものす
 其形相そのかたち不生なま不死なの如ごと。里人さとびと以もつて奇怪きがいとす。遂つひ亦また穗郡ほと郡坂越さか終つひ則すなは神かみを
 祝いのちい祠やしろとす。之これを祭まつる。今いま大酒おほいさけの神社かみやしろと号なづひ云々。後のち冷泉れいせん帝みかど治曆ちりやく四年
 正一位ただひとと授たまへり。當社あたの縁起ゆき天和二年てんわに。吉田よしか卜部うらべ兼連かねの筆ふでと見みたり
 去程さきほど河勝こがかつ召よ召め隨まひ参丹ま。謹つとんで階下かひに平伏ひらせり。中臣勝海なかつくみかたの大夫おほ勅しやくと奉たり
 河勝こがかつ對むかひ主上みかど先帝せんていの御遺誠みこす。新羅しんら誅伐しゆばつの御氣色みけしきあり。夫それより百濟國ひやくさいこく
 の日羅ひら才さい機軍きぐん略衆りやくしゆ不な起おこたる事ことも敷聞きふ達し。汝なんぢ往ゆ昔むかし故こあり。日羅ひら人ひとと為なり
 相あひあひす。即すなは今日こんにち日羅ひらとりく將軍小弁こべん也なり。新羅しんら誅伐しゆばつと任まり於て於て於て
 其功そのこうと頭かぶひさや不言ふ。詳こまく奏聞そうと有るに。河勝こがかつ砌下せいか畏おそる臣等しん。幼推よちの
 時とき百濟國ひやくさいこくの調使てうし本國ほんこくへ歸かへり砌護ご送使そうしの人ひと隨まひ彼國かのくにの日本府にっぽんぷ至いたり日羅ひら
 交まり元年げんねんとり日ひ々ひ教きやくと兼才さい機人きじんと為り能有よ知ち候こう元來げんらい此人ここのひと吉備津彦きびつひこ
 の命いのちの男おとこ三井根みやいね子命このみことの末葉すえ也なり。代か肥後國ひごのくに小住こぢ。葦北あしきたの國造くに阿利斯登ありしとんが子

から阿利斯登ありしとん小瀬こ瀬せ推お小雀こすずめ天皇てんわう 武烈天皇の御代百濟國の宰彼國かのくにへ
 渡わたり彼土そのくに不な於おて官人くわんにんの女むすめと妻よめり。日羅ひら産うり其後のち阿利斯登ありしとん任まり本國ほんこくへ歸かへり
 と其妻そのよめ小日羅こひらと子彼國かのくにへ殘のこり置本國ほんこくへ還かへり。夫それより日羅ひら百濟ひやくさい在あり人と成なり
 昼夜ひるや書籍しやくしやく小眼こがんとりし普く天下書てんかとりの見事みことが故小國王こくわうの為ために
 抽ひんで用もちひれ官達くわんたつ卒そつ任まり國の政事せいじ小預せより候。智謀ちぼう人ひと不な起おこり力量りきりやうありのも
 奇異きい甚おく多く第一渠みち身みより光と放り熟睡じゆく時とき側かたより伺ひ見る小全ぜん
 螢火えいの眼がん赫しやくとり。人ひとと面おもてて見み合あはれ。眼がん中ちゆうより金光きんかうありれ。直ただち小人ひとの眼がんと刺さ
 如ごとく其余そのあま人ひとの相あひと観て吉凶ききう禍福くわふくと告つぐ小。一ひととして違ちがひをなす。世よ小珍せうしんと
 人物じんぶつあり。勅しやくとりて召れま。来朝らいてうとり。若し新羅しんら誅伐しゆばつの儀ぎと勅しやくしり。渠みち究きゆうめ
 て思量しゆりやうありと具ぐ小日羅こひらが徳とくと奏そうしり。物部守屋ものべのしやう大連おほ菟我うが馬子まこ大臣おほ不な仰おほ
 て勅書しやくしよと作つくりり。御喚使みことりて紀伊國きいこく造つくり押勝おしかつ吉備きびの海部うみべ直羽ちゆう嶋じま兩人ふたりと下され
 り。余あま後のち押勝おしかつ羽嶋うじま百濟ひやくさいへ還かへり。臣等しん彼國かのくにへ至いたり。勅旨しやくしと宣のたまふに。百濟ひやくさい

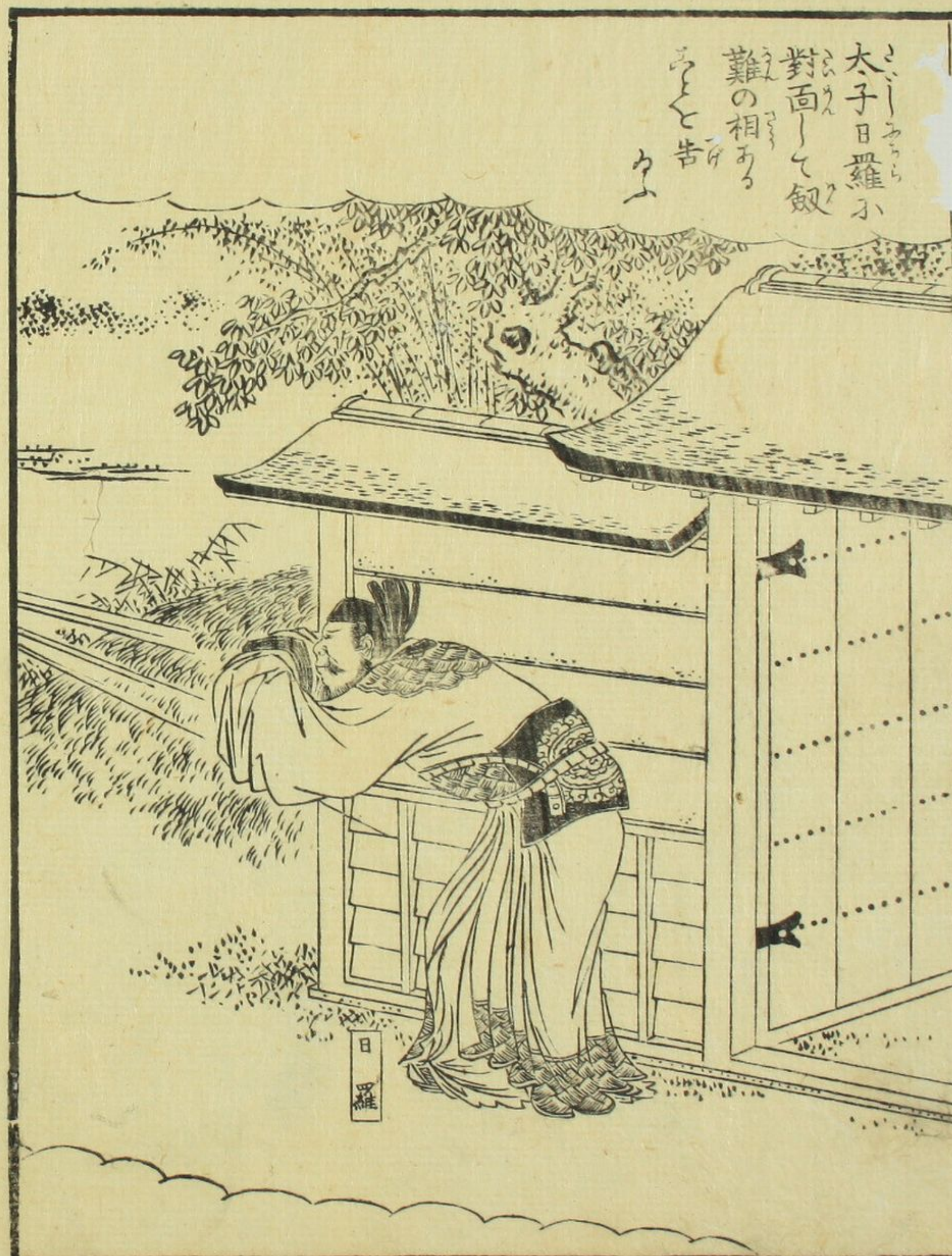
王日羅賢者... 若ハ朝廷不許。還ハタラズ事と察シテ。臣等
累々論シテ。固ク辞シ敢ク承伏仕らばと奏シテ。天皇ハ香
思。名レ種々叡智とウラレ。重ワテ羽嶋一人ハ仰含メテ。汝竊ハ彼土ニ渡
何ヲシテ日羅家ヲ訪ヒ。朕ハ賢ト慕フノ實ト告ゲ。渠我國ノ思ト思
忍ク来ルも量シ。何ト對面シテ其志ト伺ヒ来ル。密勅ハ再
韓土ニ渡シテ。今般唯何トウ。百濟ノ日本府ノ内ニ逗留。或日ハのびヤ
日羅家ノ門ヲ裏ノヤ。同ノ所ハ一人ノ韓婦トシテ。小門ノ裏ヲ出
韓語ヲ言ク。汝ハ根ト我根ノ内ハ入リ。言テ其終走リ入。羽嶋其意ト悟
婦人ノ蹟ヲ見テ入リ。三韓語ヲシテ。去来我ハ隨テ入り。云ト我根ハ汝
根ハ入リ。聞キテ。實ハ何レ語シ。此時日羅ハ堂ト下テ。羽嶋ト迎
再拜シ。其後一面小座トシテ。日羅ハ聰明愛シテ。儼然トシ。其身家ノ裏ハ
在リ。羽嶋ハ勅使トシテ。門外ニ来リ。イヒ識テ人ト出シ。詰リ入。如此態慙

小禮トシ。神ト通ジ。言フ。此ハ羽嶋天皇ノ密勅ト演説シ。懇ク本國ハ
求メ由ト告ル。日羅再ハ日本ノ方ハ向ヒ思ヒ謝シ。臣父トシテ。天朝ノ初
我幼稚シ。父ノ為異域ハ捨ラレ。日ハ本國ト慕ヒ。何ハ骨ト日本ノ地ハ
葬まん。希ム事年久。天皇臣ト召シ。禮ト以テ召ル時。幾回勅使
ト賜ル。百濟ノ群臣敢テ臣ト奉リ。勢トシテ。徴シテ。速ク承伏仕
下。一謀トシ。羽嶋歡ビ。地ト猶閑談時ト移リ。歸ル。是
羽嶋ハ日羅ガ教ヲ隨ヒ。數日ノ後百濟王ヲ見。臣ハ帝都ニ歸リ。大王ノ
言トシテ。復奏セ。我天皇大ニ逆鱗トシ。往昔先帝在位。日
百濟トシテ。新羅王ヲ七マシ。天朝ノ威トシテ。新羅ト挫ギ。餘日王
トシテ。百濟ノ王統ト繼ビ。今其天恩ト忘ル。勅ト背キ。日羅ト渡ル。何
ノ道理ト。若勅命ハ不應トシ。筑紫國ノ勢トシテ。百濟ト誅伐セ
ラ。十分威儀ト正シ。申ケレ。元来百濟ハ柔弱。國風也。天皇乃

子相顧。恐驚うとて。日羅の曰。君正。天皇の皇子とて坐せし。如何なる故ありて卑賤の牧童不群とせし。又御手と取。館中へ請。奉。皇子も今の御衣と更。日羅對。宣ひり。我。當今の御甥。麻戸の皇子。卿。才凡夫。あはる。由。傳。愛。来。果。汝。凡眼。あ。驚。とのな。日羅又。是。皇子日羅と物語。旧知識。須臾。皇子日羅。面。眩。度。觀。今。卿。面相。見。正。人の為。不。害。非。命。の。死。免。色。あり。宣。慎。日羅笑。臣。幼。年。此。相。更。死。と。顧。吉。凶。禍。福。天。受。得。所。の。數。あり。伯。夷。叔。齊。如。賢。人。猶。餓。死。況。や。其。余。某。屬。の。凡。人。何。を。惜。じ。足。び。と。答。誠。お。皇。子。の。明。神。不。通。如。果。日羅。奸。人。の。刺。蒙。其。年。と。越。死。新羅國の調貢使の程。帝都と辞。退。日羅と桑市。召。王。座。

四

迫。進。渠。容。良。と。徹。覽。兩。眼。炬。と。列。如。耳。珠。と。岳。た。小。美。鼻。腹。人。物。甚。勇。壯。潜。龍。の。雲。中。伸。如。此。馬。子。宿。稱。と。以。政。の。大。吏。と。並。任。那。國。と。真。新。羅。と。亡。計。策。と。勅。問。日。羅。合。掌。奉。陛下。天下。と。平。あ。て。皇。統。連。綿。乃。代。朝。恩。と。蒙。仁。智。深。人。勅。向。又。任。那。國。役。新。羅。と。伏。給。賢。人。と。招。恩。と。罰。と。省。民。食。と。足。兵。恩。澤。と。朝。威。仰。民。調。貢。と。進。死。と。顧。水。火。の中。入。と。身。恩。沢。死。と。思。皇。國。軍。鼓。の。声。と。聞。誠。富。榮。如。斯。三。年。其。後。軍。船。糧。船。と。作。筑。紫。及。び。諸。國。の。津。浦。小。巖。重。小。備。置。三。韓。と。誅。伐。其。勢。と。張。三。韓。渡。来。の。調。貢。使。自。然。と。見。懼。れ。慄。本。國。小。歸。此。三。韓。王。告。其。時。智。臨。氣。應。慶。と。察。



太子日羅不
對面して叙
難の相ある
うと告
う

三國七高仲傳卷六

日羅

勇烈火の中ふあうと恐れ辨人の心と動とよき良臣と撰ひ其人と以て一番
 百濟國餘昌王と召さるべし。若来る時其子太佐皇子或は高官の者と召れ
 来るに禮と厚くし。禄と重くし。以来王自ら朝参するも能くは王子親
 戚とて三年は皇國小参朝し。交々質して来ると嚴重に勅し。之
 他り心は傾け従ひ奉らんと誓ふたは高麗王も諭して召さるべし。高麗國も百
 濟國と齊しく柔弱の國風なり。速に來り。若又來る時王子大臣
 の中と召れ百濟高麗志と同し。朝廷に伏し。不於て良將一人とせ。之
 新羅國も遣り。速に任那の地と還し。任那とよと勅し。之新羅
 命も復して任那の地と朝廷へ還し。奉ら。其は豪傑一人と撰ひ。固任那
 國と持を如此く。彼國の先王の裔とよとせ。おれ臣聞任那王の裔今
 亡びて一人と血脉あり。然る任那と持つ大将も。久く彼國も置
 給ひ。僅に三年と限り。別し忠義をば。良將一人を。張ら。つと

遣り。是より代く任那の代番と定め三年と一任し。又任那の番將も赴
 者も妻子と遣り。自然彼國の女も媼も。あは。嚴罪も處せ。之
 日法令と定め。任那の地へ全く皇國の有とせ。儲又新羅王も兩國
 の如く召られ。来る時。是も王子倍臣の内と召れ。後ハ倍臣と質する
 こととせ。之も三國の太子たり。者と招き。三國交代して一王の國も置れ。
 二王ハ皇國も止る。是ハ三年交りて交還する。元來百濟高麗ハ。之ハ
 柔弱なる國風なり。敢て勅と背く侍ら。新羅ハ人氣勇壯なる
 あり。究めて一番も背くと。惟。其時ハ兩國の兵も我國の軍勢と合せ。之
 押渡れ。速に誅伐し。た。百度千回降参と乞ふ。赦し。之。新羅王と
 誅し。其後の地と五五分ち。其二分と皇國の官家と。二分とハ百濟國ハ賜り
 聖明王ハ時の忠誠も報ひ。一分ハ高麗國ハ賜り。之。思賞と給は。永く悪心を
 生じ。之。後ハ百濟高麗兩國の王も。自ら朝参す。時ハ一年

宛交々朝参せり。如此の如く三韓の人の皇國の人とす。色と重んじ愛を
 厚くする。故に此國の婦人をもよく妻とせん。と請へ。其時の願ふ任を聽
 けり。自然皇國をて子を生じ。交代して歸りて妻子とす。て歸りて
 又兩國王太子とす。男子幾個あり。皇國をせ生ぜし者と
 世嗣とす。と勅し。永く皇朝の奴とす。自ら國家の藩鎮とす。是
 兵と用ひ。太平久し。道理あり。富國長延の計策とす。奏し。天皇歡感斜
 多し。多く禄と賜り。日本止ら。則ち群衆の素市の館を還せ。且又百濟より送
 まり。恩率参官。其餘の官人をも各物賜ふ。是は本國へ還せ。勅し。蒙り
 官人等もて。帝都と辞し。難波の館を退き。日と定め。発船せんとす。然るに此時。思
 率参官竊ふ。德爾余奴等。小叫。吾徒兩人。此地未去。後日羅と徴
 容子と伺ふ。心く新羅と誅伐し。仕那と與へ。計畧と求め。なす。ん。と
 かり。由新羅。我國先王の讐敵なり。あ。日本力と合せ。俱に恨を報じ。ん。

とも。早竟渠々計畧。因に三國とす。勢と挫し。独日本の威風と強し。
 終ふに我國の大王も。千里の波濤とす。此土に朝参し。奴僕の如く驅役
 必定あり。退き。事の意と顧み。日羅と其伴。不捨置とす。決りて後の患ひ
 けり。卿等。い。此土に止ら。國の爲に命と抛ち。日羅と刺殺し。復し。我
 輩。其間筑紫の地。止り。卿等の安否と窺ひ。相待。事。筑紫
 まで。逃来り。一同。本國に歸り。又我々と諸。此謀略と成。ん。と
 お。平常日羅と親。一。万一渠が。爲。疑。れ。て。却。て。仕。損。を。す。ん。と
 是非。各の心底。思。い。歎息。つ。尋。る。德爾余奴等。と。辞
 せ。我。と。此。心。あり。國家の爲。露命と捨ん。莫。何。ん。足。人。足。下。未。後
 日と責。我と待。速。本國に歸。之。面。兩個。も。幸。日羅と。脱
 り。成就掌の中。あり。猶計略と示。合。思率参官。別離。再。末
 市の館。歸。斯。德示余奴の兩人。大和。歸。日羅。前。出。戀。と。涙

を流し我々二人帝都と辞し難波より発船せんと仕うしと一ふ此國の天皇の
徳と慕ひ二ふの數月船中お於て先生の教と蒙り夏ともと思ひ敢て捨るふ忍び
こと主歸り侍りぬ願ひ先生序より朝延一奏し我輩永く朝廷の臣を
ちして止らり其思廣大とんと實しやふ敷くもど流石に博物の君子と
しと人心乃奸計と察せんとす悦んで兩人ととも我宜し朝廷に奏し
人々と驚か奉べしと終に館中おどめらるるを薄情けれ是より昼夜ととも
はく宣し時と得り刺殺せんと計らるる元来日羅は才機孫呉に彷彿するもの
あはひ勇力人勝るれば容易の事計らるる左や右猶豫るる内昨日と過
今日とれて徒も同年十二月ふりふり此れ日羅は常小海濱の眺望と愛
難波の大郡の風景の地ふ止りたこと奏るれば天皇渠望任せ難波の館の
側小住る旨勅しむ同月難波お移るる徳爾余奴と俱小難波おまごひ
未だ夜毎小日羅と附移る衣服の裏に劍とかくし持て深更おふふを

待く己が所と忍び出寢所より伺ひり。殺害せんと計ひける。然る小日
羅の熟睡もろふ後身の内より光出現し寢室燈火と列たる如く流石に大膽
不敵の徳尔余奴も是ふ恐れく迫げし能はし誠小古今未曾有の人物
なり。されとも兩人氣と厮り尺寸の間と急る余念と忘れ伺ひり。十二
月晦日の夜例の如く更を待て日羅が寢所へ移るる隙間より闖き見
る小天運の縮る時節なり。今夜小あきり身の光も現れ。偕ひしと熟睡せざる
や否や猶と外お身とすりし耳とをぞと能きん日羅が鼻雷車と引きし。
兩人おし衣裏の短劍と抜きし。今夜皇天百濟の運と守りり。又我々の
誠忠と恵りり時る。此時と去らば何時の本意と遂げし寢所へ潜り入
徳介劍と下して日羅の胸のより一突し貫く。最も三韓無双の豪傑とし
刺客の手と免るる夏く声も立て死してをぞと最惜し。此事さし小知
者より竊小己が房より短劍と隠し。知らぬ顔し居たり。夜明て後日羅が

後臣寢所入て見らるる大周章一四方の人と喚聚り衆人工と下て之。
 皆々群てまつく骸と見らるる氣息とて絶え身軀石鐵しりも冷る。諸人
 口々言々是他所より忍入て害したる非を恐る。邸中亦多く日羅恨
 有る所為らんとす。近臣の云く。否。よ。い。あ。し。今此所へ館小隣らる。彼館
 中よ新羅國の人逗留して多る。疑らる。是が所為らんと其詞亦終ら
 ざら。日羅忽然と蕪て全く新羅の所為らる。我部下ある徳爾余奴ホ
 手子死せり。我又恩率三官と殺せしと言早りて息絶たり。近臣亦急小徳
 爾余奴と搜せし。早此所と落失らる。先早馬と以て帝都亦急と告り。ハ
 天皇日羅横死と憐らる。四方早使と遣し徳爾余奴と求らる。所亦既
 兩人の播磨國虎子の湊りて逃去らる。擄りて朝廷奉る。有司の人々徳爾余
 奴と拷問あり。日羅と殺せり。莫と悉く白狀不及。頃て兩人と獄屋入
 日羅一族肥後國葦北の國造小賜と彼が為小仇と報る。由勅り。眷属悦ぶと

限らる。姫嶋の地に於て徳爾余奴と殺し日羅が恨をこし。此は恩率参
 官ハ筑紫の地とす。兩人の安否と伺ふ。兩人既小擄らる。聞船と出
 て遁帰らんと。對馬の海上と過る。俄に逆浪天小漲り。満天漆と流が如く。須臾
 の間小四方闇夜とあり。潮煙たつ。船の辺尺寸の間と見分なく。船中大小根俱
 さら。舵帆と下し。楫と直さんとせし。叶ふ。又黒雲驟變とて。雲中小日羅の
 姿有る如く。船中より驚き水主揮取。至近魂魄身小添る。恰純と解る。糸
 繩の如く。風弥烈く。船忽ち巖の上小乗ら。微塵小碎け。恩率参官ハ海底
 溺れらる。なる。端船小のて。地方小遁ら。若後此とて。語らる。是と聞人毎
 羅が怨靈の嚴重とて。感歎。斯有。程小厩。ハの皇子ハ日羅死と恤
 けい骸と振州小郡西町丘の前小葬。たま。誠小皇子の神。通。ゆ。今。年
 僅十二歳。て。ま。日羅小對面。ゆ。時。早。も。此。難。事。た。と。知。召。さ
 して。更。凡。夫。の。論。ど。所。亦。あ。び。感。を。尊。之。

五

敏達天皇十四年乙巳の年天皇御吳例小師く日不師孫重らせめひ終み秋八月
 十五日あり。大膳山崩御ましり。皇后皇子ハ申も更らり群臣の歎き一々こ
 るふ。いんも北俱盧洲の千歳なるも終に滅盡の時あり。南浮提不定の人壽王者
 とす。と道きそのそ是悲うたれ斯く玉體と廣瀬小瀨一奉り物部子
 削守屋の大連蘇我宿祢馬子大臣うび小群卿皇太子攝豐日尊聖德太子と以
 て天皇の寶位小即奉る。又皇世代の聖主是なり。即位しして後都と大和國磐
 余の地不討さやひ是と他辺双槻宮と稱し奉り。蘇我宿祢馬子と以て旧の
 大臣と物部の守屋と以て大連と。其外群臣の官職故のどと備も厩戸の皇子
 御年漸小長しとせめひ用明天皇元年丙午よハ十五歳小成らる。天皇踐祚の
 後ハ上宮よましく万機之事と補りめよ是より上宮皇子とも稱しなせらる。こ
 用明天皇二年丁未のよ四月日天皇磐余河上の宮小おひて大禮の式行せめめ
 とらふ御意地常らび玉體忽ら御惱と得せめひ群臣大に驚き急小宮中へ

還幸なせ奉りてさめ勞り奉れも孫重らせらるべ厩戸の皇子ハ昼夜玉躰の
 側へ去給る。主上一をひ供御召たり。時ハ皇子も共小食らぬ。日供御
 召上られ。時ハ召上られ。備此時も皇太子と定のハ天皇原來
 万民のよ厩戸皇子と以て皇太子小成らんと思はせも固く辞して受させ
 給はらり。先帝敏達天皇の皇子許多し。弟一は押坂彦人大兄皇子。オ
 二ハ難波の皇子。次春日の皇子。大派の皇子。竹田皇子。尾張皇子。是よりつて
 弟一押坂彦人大兄皇子と以て皇太子と成らぬ。或日天皇群卿小向ひ勅しめ
 り。朕平日三審以歸依り。今三審小祈り疾平愈せ。益三宝を尊信
 せ。若又愈ざりて死なんハ後世の眞福と蒙らん。されハ道德勝れ
 る僧と請し来ふ。此時予削大連守屋中臣勝海。わくく進出て奏し
 て云く我國ハ神國なり。天皇曾て我國の神祇と祈らぬ。何ぞ外國の邪法と信
 一。佛と拜しや。國津神への恐らり。と般々止奉ると。天皇敢て守屋

勝海が養と容るるべし此は押坂彦人皇太子と奉る豊國法師とる道
 徳殊勝の出家と請し玉體不迫つ祈るる守屋勝海の両臣の心中甚だ
 憤る豊國法師と白眼つ満面怒の色とあり座と蹴まを立りぬ
 是より守屋八當今帝の御弟皇子穴徳部の皇子と以て天下の主と奉ん
 と計り此穴徳部皇子と申奉る御母は蘇我稻目の女小姉君とて用明帝の
 御母取塩媛の御妹なり姉妹も小敏明天皇の妃なり御寵愛浅く御姉堅塩媛は七男
 六女を生きた御妹小姉君は四男一女と産る則用明天皇と穴徳部皇
 子との異胞の御兄なり又穴徳部皇子の妃の父君宅部皇子と申す守屋とていひんべ一説
 にも及ぶ同意したまはる此皇子は先々十九代宣化天皇の季の皇子なり
 穴徳部皇子は其生質玄曲すと禮ふ抱るべ人の諫と用ひるるのそり
 色あさる憍倭究るる既不敏達天皇當今と皇太子と崩御の御兄皇子
 の密位小即ちと恨るる當今と退け奉る皇位と奪んと計りて
 凡行状善く不義の事ども多くありて薄情さ

抑佛法本朝不渡る始へ人王卅代敏明天皇大和國磯城郡金刺の宮在即位十三年壬申の
 年冬十月ありて百濟國聖明王の方より西部姫氏達率怒喇斯致契西國と
 其司も之姫氏の姓達率の官名とる者と使して始り釋迦佛の紫銅の像一
 軀と幡蓋とびふ佛經同く論書數百千卷と持て朝廷不敵別不
 表と奉る其文云是法於諸法中最爲殊勝難解難入雖周公孔子尚
 不能知此法能生無量無邊之福德果報祈願依恃無所乏缺且夫
 遠自天竺爰洎三韓依教奉持無不尊敬由是謹奉傳帝國云
 天皇原來万民と惠たまふ又諸法と尊るる故不敵慮歡喜料る
 然れども自ら善惡と決り事ある群臣不歴問の是と天下不弘べし
 とて悉く朝廷不之と納るる是佛法皇國不入の權喪る斯く天下一日
 群臣と召し今度百濟國より佛教と送朕彼佛像と見る不甚端嚴也
 之れと拜するや否や此は一統と一言と答るる不蘇我大臣稻目すこ

百濟國
佛像
の書と獻ど

百濟ハ和名久末羅
トシ其國オトシ五十
余國其大國ハ二万余
家小國數千家
總計十万余戸
トシ新羅高麗
百濟ト一統トモ
今ハ朝鮮ト号シ



昇平より則ち先帝の都大和國磯城嶋金刺の宮あり。譯語田幸玉宮又ハ磐
 余池邊雙槻宮ホ在り。同天皇六年百濟國より佛經禪律佛工寺匠示と
 獻じ。同八年新羅國より釋迦像と貢る。同十三年秋九月百濟國より鹿深の臣
 と人彌勒菩薩の石像一軀と朝廷に獻じ。靈驗明著き。と奏し。ら
 獲我馬子の父縮目あり。佛法と尊信し。主上石像と馬子宿称
 あり。馬子大に敬び。則ち杖館の側小佛殿と經營する石佛と安置し。
 香華給仕する人を選び住持せし。高麗の僧慧便と。者播磨國小有
 一と迎へて護らし。且梁人司馬達ホ女善信尼と以て。齋會と設く。此
 時司馬達ホが食する齋の飯の中より忽然として舍利一枚と得り。光赫灼
 る。尋常の物あり。頻て馬子小獻じ。馬子慧便小見せし。慧便之と
 見て三度禮拜し。申す。是佛舍利なり。舍利の功德と詳く語す。馬
 子ハ信心肝小徹し。舍利と金函小。朝廷小奉り。慧便が語し。舍利の功德

と奏し。天皇けり。群卿の奇異の思ひ。彼舍利と朝廷小止らる。海内小
 定り。然るに物部の守屋小始り。佛法我朝小。海内小弘く。と
 憤り。蕪我の馬子の佛徳と尊し。且小心小快く。其上和漢も小兩雄同
 朝廷小並び。守屋大連。其為人豪驕。人を見る
 事莖芬の如く如何。馬子宿称の非と見。其職と逐退せんと
 思ひ。馬子も其心女悪く。且聡明。一族蕃茂。官職ハ守屋の下
 有る。威勢ハ守屋が上。故小双方小便と。其威と傾んと
 害心と。程小今佛舍利と朝廷小止ら。守屋の
 大連中臣勝海。進出て是と。數語と。諫奏する。有
 終子馬子宿称と義論。及び。其善惡と試ん。舍利と以て鐵質小。有
 司小仰せ。鐵槌と以て之と打し。然るに鐵質ハ陷じ。舍利ハ更小壞す
 又水小投。沈す。天皇甚。其宮中小止んと。す。

守屋勝海ハ心底と願ヒシ舍利ト馬子の宿禰小還賜リ朝廷ト
退けられ馬子の舍利の奇瑞と尊ミ彌佛乘小歸依ト高市郡大野の北
小塔と建立シ舍利と塔の柱心小安置シ天皇の十四年二月十五日塔成就シ大會ト
催シ教ト限カシ然ラ小此時天下大疫癘行ル家ト小悉ク病ヤシ民
少トシ數トモト物部守屋大連中臣勝海小参内トテ奏シテ先帝臣
等ガ諫奏ト用ヒテ小福目父子ガ奏シ奉ル旨ト信ジ異國の邪法ト容
ナシ尚當聖代トシテ是ト捨サセヨリ故小疫癘民間小流行シ庶
民十小八九ハ死シ國中の人種小既小絶ルントモ小蘇我の大臣の佛法
ト興シ行カスヨリ其上石川の宅の東小寺ト草創シ多ク僧ト集ル
三個の尼僧ト此処小住持セリ僧尼一緒小有テ猥小女淫トシ
ウケル速小僧徒ト追拂ヒ三個の尼トシ佛殿ト燒捨ラレシ神明納
受アトク疫癘止ト疑フト奏シテ折ラシ馬子の宿禰朝廷小魚リ

守屋勝海小阿ト諛フ徒人の言アト異口同音小此ト奏リレバ
天皇守屋ヲ奏サスルセ寺館ト破却トシ詔下リ程小今日守屋時
刻ト移レ諸有司ガ軍吏の後ト引卒シ先石川の宅の東リ彌勒の佛
殿小カ寄セ其身小寺中小胡床トシ其工小踞坐軍吏小指揮シ
炬火ト振テ佛殿佛像トシ焼キ惜ビ美麗トシ
高樓大廈忽シ之圓の尖ト變ド猛火ハ東西小充満テ乱火の下リ
出ル僧尼烟小ヒ手足ト焦シ漸次出ると軍卒三尼ト擲シ夫
即ラ小大野の丘トシ斧ト揚テ佛塔ト斫倒シ爰モ火ト放ル斯
三尼ハ海石榴市の亭に穿ト造リテ入置佛像經卷燒殘ラレ物ト
悉ク難波掘江小捨ラレ蘇我の馬子の愁傷アト遂小病ト發ト
主上病ト向セテ小馬子歎奏シテ曰ク臣ガ病頗重シ三室のら小
めん平愈アト帝ト憐ミあつ汝即チ佛法ト行カス

之と許され、橋三尼の行狀正しく明白なりし程、馬子も還し、
 馬子、再び獲生の意地、稍て又造功を起し、義鹿の佛刹を往營ける
 時、今年天皇御異例、不渡らせり、終小秋八月朔御伊しく用明天皇
 宝位、不即せり、ひらく、不即位、二年丁未の歳に至りて、御不豫、
 より群臣、不のたまき、朕佛法を帰して三宝を祈んと欲すと、此時守屋及
 中臣勝海等曰、何ぞ國津神と背きて外國の神と敬んや、馬子曰、唯詔を
 任べし、豊國法師と宮中、不入祈禱せしむ、是より、稱馬子守屋遺恨を
 含み、終小大乱あり、用明天皇、僅不在位、二年、不、山明御在り、
 備も物部方、削守屋大連、中臣勝海、不、天皇の佛法帰依と憤り、豊國法師が
 参内の時、暫朝参り、忌居たり、諸卿疑とぞと、慮り、人列、不、参内
 群臣とぞ、列座せり、突や、隠り、頭を、既、不、守屋大連、中臣
 勝海、此程、穴穂部皇子と、以て、天下の、奉らん、計議、群卿の

六

耳、不、漏、人々、所、不、頭、合、斯、此、打、捨、世、大、乱
 乃、端、も、る、ん、辰、守、屋、が、今、日、朝、廷、と、退、く、処、と、路、次、不、お、ひ、て、討、取、下、と、豫、計、議
 と、決、守、屋、の、飯、と、路、頭、に、仗、兵、と、置、ん、と、喧、さ、る、丹、守、屋、不、一、味、同、意、の、人、多、不、
 押、坂、部、史、毛、屎、八、坂、大、市、連、小、坂、漆、部、連、等、り、昼、夜、頭、と、交、好、討、と、し、
 何、り、と、刺、客、と、用、い、竊、不、皇、太、子、押坂部人、と、刺、殺、し、奉、ん、と、ユ、り、時、不、押、坂、部
 毛、屎、の、群、卿、と、守、屋、と、討、取、を、計、る、催、し、と、揺、り、聞、り、守、屋、が、耳、元
 不、奇、云、々、の、企、と、以、て、公、と、討、取、ん、と、討、る、由、兼、と、復、ふ、未、だ、路、次、と、は、
 塞、が、り、己、前、不、疾、府、中、に、退、き、兵、と、催、し、豫、防、禦、の、用、意、を、り、
 某、も、追、付、参、下、と、云、不、守、屋、と、い、密、計、漏、り、と、覺、ゆ、暫、時、と、猶、豫
 と、勝海、不、明、と、兩、人、一、同、不、朝、廷、と、下、り、河、内、國、淡、川、郡、阿、斗、の、別、業
 不、引、退、き、俄、不、人、數、と、催、り、元、未、守、屋、が、重、思、不、滔、と、徒、府、中、不、丸、滿、
 其、上、开、領、の、地、廣、大、不、と、家、人、許、多、持、れ、朝、廷、諸、衛、の、兵、と、恐、る、足、
其、上、开、領、の、地、廣、大、不、と、家、人、許、多、持、れ、朝、廷、諸、衛、の、兵、と、恐、る、足、

と待けり。中臣の勝海も已家不指籠。時不臨んで守屋と後指。一戦及んと同じく勢と催し。帝不御不豫不渡。此自然敷聞不達し。るば御腦のう不御心と痛さ。有司の諸官おの朝延と辞し。兵衛武將甲胃は。奏奉らば。有司諸官おの朝延と辞し。馬子守屋の不和より起り。鎧ひ子夫と獲。大凡の皇太子の宮中不馳聚。馬子守屋の不和より起り。私不打果。人馬と申も有守屋勝海の西人皇太子と立替人馬の及逆より。とも云ひ途巷の浮説區々して。都の騒動あつて。湯の沸が。獲我馬子。不隨心の徒。獲我の館不寄集。甚嚴不捕。古今未曾有の大變。時中臣の勝海。家不の墓。勢も未だ。事成り。覺束。察し。皇太子の宮中不参り。降参り。稍て罪科と省。然れ。是全く本心不。あつる事と察し。皇太子の御内不舎人。迹見の赤檣。勝海を還と追。唯一太刀不伐殺。守屋ハ勝海が討。由て傳。斯てハ大望成。思慮

とらぐ。馬子宿称と詐て和儀と。馬子詐ると。是と兼伏。即日和睦調。此於都の内漸く静。諸軍甲胃と解。諸方離散。穴徳部の皇子。守屋の大連と共不参。上下安堵の思。然る。天皇御惱。日々重。同月九日崩御。是。群臣日と。選ひ太子と帝位。不即奉。時皇太子。御異例。五月。不斐。百官有司。安心。継體の君と定。奉。先敏達。天皇の皇后。豊御食炊屋姫尊。以て主。皇后。天下の大政。聞。四月。六月。皇位。定。諸卿。詔。多岐。不。更。不。決。時。穴徳部の皇子。守屋と。合。馬子と。七。炊屋姫の尊と押。帝位。不。大。手配。定。此。馬子の宿称。乃。方。漏。聞。馬子。直。不。参。皇子。守屋。計。畧。二。炊屋姫。不。奏。其。夜。諸卿の兵。五。百。余。人。遣。皇子。御。内。の。一。族。悉。追。伐。手。ぬ。



守屋官軍と
敗る謀略と
指揮と

守屋軍慮と
六百人の鉄卒と引
率一官軍の
半途に埋伏して不音
子起つて奇討と
大に敗る皇太子
もをくあつた
あつて官軍数回
敗北と

三回七高竹傳國公巻六

守屋の大連、穴穂部の皇子の亡ゆい、由と聞きて、大車露頭せり。今ハ罪名通る道
 か、れも天下の豪傑、者自ら倒るを待んや。大軍と引け、花々しく戦ひて討
 死せんと阿斗の別業と、も家々火と放ら、一燼小焼とて子弟等數千人と
 引卒、河内國淡川の別業、不立越四面、城戸櫓と擡き上敷地の丹子高と
 數十丈の榎の大樹あり。一本とて敷地と覆り、其枝と小櫓と高く櫓と造
 要害堅固、小櫓籠と諸方の逆賊と招き募り、兇賊ども追々馳加り、押坂
 部の史毛屎、八坂大市連、小坂漆部連と始り、徒類者属あり、ハ國々の無頼、凡
 三萬餘人、野や山、あつれ、夫とて櫓と造り、合戦の用意専らせり。蕪我
 大臣のそ、炊屋姫の皇后、不養、り、皇后諸國の官軍とせられ、守屋誅伐
 の軍議と遂り、とて諸皇子諸卿と召集り、此時、既ハ皇子十六歳、ふら
 らせり、諸皇子と共、軍義あり、小言、誥利非明白、ふして道理不的、とて一決
 一、同七月朔日、官軍淡川、ぞ、向ら、皇族、ハ泊瀬部の皇子

欽明帝の
 竹田皇子

難波皇子春日皇子、敏達帝の、厩戸の皇子、群臣あり、獲我馬子の大臣、紀臣、菅宿、称臣
 勢、巨比羅夫、膳臣、賀抱夫、葛木、臣、烏那羅、と始り、諸衛禁軍、國々の軍勢、都合一萬
 余人あり、就中、泊瀬部皇子、ハ年、齡、長、甘、ま、せ、り、諸軍の指揮、と司り、ま、ま、い、真先、と
 備、大和國池邊、雙槻宮、と發向、一、同日、河内國淡川の城、ぞ、寄られ、此、とて
 守屋の大連、ハ賊群とあり、堅固、小城、と修、官軍、既、小、押、と、聞、り、路、次、の
 半途、不、伏、勢、と、置、く、押、し、を、來、る、諸軍の半、と、不、意、小、起、つ、く、討、て、る、程、小、官
 軍、ハ、い、ひ、も、う、び、隊、伍、を、な、り、色、々、に、散、り、敗、北、を、既、ハ、の、皇、子、も、大、勇、戦、一
 け、と、守、屋、が、大、軍、小、敵、と、終、老、の、原、と、し、所、ま、を、敗、走、し、此、小、屯、一、夜、と
 あり、再戦、と、ま、ま、ん、と、議、せ、れ、翌、七、月、二、日、敗、軍、と、集、り、て、淡、川、小、押、し、を、數、回、攻、戦
 と、之、と、悉、く、敗、り、一、度、を、勝、利、と、得、り、し、厩、戸、の、皇、子、軍、慮、と、り、し、秦、示
 河、勝、迹、見、赤、檣、當時、既、ハと、始、り、て、僅、二、百、余、人、の、勢、と、引、卒、一、所、詮、人、力、の、戦、う、て、ハ
 勝利、有、り、も、覺、え、び、偏、小、佛、天、の、擁、護、と、り、て、戦、ふ、ハ、如、と、折、し、も、御、陣、の、側、小

白膠の木有ると伐採す。自ら四天王の像と作り頂髪の中ふ結び入。又諸軍も四天王の像と画さる。縮て甲冑小結つりて。曾て諸王子達も告知せらる。夜の更と待て陣中と多ひぞ。同日曉黎。淡川の城小押す。此猶豫とあり。皆こと同音。小関の声とあげらる。賊軍へ兩日の戦ひ小勝利と得て。官軍恐るふ足らば。心橋とて忌と。何の思慮も。肝と處小朝雲深。其下。旗旗空小翻り。去々と攻附たり。俄の奇手小城中おどろき。周章大。尤其勢僅二百余人。小して。城中の勢小く。九牛一毛と。官軍小の神明佛壇の擁護や加。以の外の大軍と見え。城のほろ。奇附と。面々物の具と。著以。大裸。成て。櫓小のち。散々小夫と放ら。多くのあ。矢と射捨。れば。矢種大半射尽。り。跡小残。官軍の陣小の。厩小皇子僅の勢。して。淡川へ。向。り。曉。小聞え。諸皇子始。馬子と。以の外。驚嘆。何。以て。滴。皇子の御身危。して。我。先。小。出。陣。思。く。小。駟。負。馬。廻。天。と。ほ。東西五六里。間。墓。土。虚。空。小。た。

おびと。夥。か。ど。云。尋。色。守。屋。が。城。中。より。是。と。見。て。今。日。都。り。後。誥。の。大。軍。向。ひ。九。十。四。五。万。騎。も。押。寄。た。る。小。お。り。の。戦。が。先。小。義。精。お。ら。唯。あ。ま。れ。な。計。之。此。時。守。屋。が。憑。切。り。押。坂。部。毛。屎。八。坂。大。市。連。小。坂。漆。部。の。連。忽。ち。西。の。門。と。兵。逃。出。せ。賊。群。何。と。騒。ぎ。ら。我。一。小。逃。出。し。制。し。見。え。お。り。是。に。朝。廷。へ。書。さ。る。天。誅。且。四。天。王。擁。護。し。を。覚。え。憑。り。守。屋。八。坂。の。高。櫓。小。より。大。音。上。げ。て。味。方。と。勵。し。下。知。ら。る。厩。小。皇。子。先。陣。小。進。み。諸。天。大。神。祇。と。ま。り。り。得。せ。り。四。天。王。神。の。為。小。寺。塔。と。造。ま。る。心。念。小。祈。誓。し。の。迹。見。赤。檣。小。下。知。ら。る。赤。檣。ハ。寺。より。天。神。地。祇。と。念。し。能。引。て。兵。と。も。其。矢。遙。く。遠。く。と。長。鳴。羽。響。し。大。連。が。胸。を。射。け。り。矢。屍。あ。ら。く。脊。骨。の。方。抜。出。たり。何。れ。以。て。堪。ら。ず。直。逆。小。墮。て。死。て。り。秦。河。勝。是。と。見。て。門。と。破。り。て。城。中。小。け。入。所。小。火。と。け。り。賊。軍。守。屋。討。れ。り。小。肝。と。消。し。我。一。小。逃。出。し。踏。ら。る。者。數。と。ら。げ。城。中。ハ。全。く。火。と。り。河。勝。ハ。乱。火。乃。

中より守屋が首と取て城外小出。厩戸皇子小奉る。此時後陣漸小駈つけ出
 者と生じ。討しんと影し。あれも泊瀬部の皇子とんと制し。降る者とみり
 殺し給ふ。終小城全く落ふ。偏小厩戸皇子一人の功小して衆人賞せむ
 中。儲朝廷小軍忠と抽てたり。思賞と行ん。赤檣と迹見の首小
 られ一万項の田地と賜り。厩戸の皇子養して摂津國小四天王寺と造す。其地都て
 守屋が追福の。大和國飛鳥村小法興寺と造す。又守屋が領する地。都て
 十八万六千八百九十項項ハ今の法大町六段 二百四十歩ナリあり。其地河内國小
 蛇草。足代。御立。葦原。津國於世 横江 嶋田 熊凝 あり是ホの地と厩戸皇子
 奏聞して悉く四天王寺と造して所々の寺々寄附せむ。又御一代の中小
 建す。一寺ハ法隆寺。元真寺。中宮寺。妙安寺。葛城寺。其餘もて四十六
 箇寺。實小國々の寺院多し。この皇子より發見する。程小天下既小昇平小飯ととと。赤天子の御位定む。群臣詮

議あり。泊瀬部皇子とと。皇位小定め奉る。此ハ欽明帝第十の皇子小
 して蘇我馬子宿禰の妹小姉君の生り所。帝位と御奉る。炊屋姫
 皇后の御計も。則三十三代崇峻天皇是。在位五年の間太。徳なり。所小
 いる。故有ん大臣馬子と御中使。常小打亡。手慮。此ハ
 此人執政の大臣とい。殊小天皇の御。外舅とい。其上守屋勝海等亡。び
 て後天下の政勢大。小。馬子一人小飯。所領田園尤多く。又炊屋姫
 皇后ハ敏達天皇崩御の後。天下の大政と聞。召。皇后も馬子の為。ハ御
 姪君。あ。渡。深。馬子と尊敬。威勢頗る強大。馬子も
 元来天皇の恒小已と忌嫌ひ。折。詭言。者あり。馬子と
 怒。終小逆意と企て。東漢直駒と。天皇と弑。奉。此
 とも百官有司馬子が権威小恐れ。此罪と責者。一人も。此時厩戸皇子
 廿一歳。斯て後群臣評義。厩戸皇子と以て天皇の位。奉。前て

天位を知りて是を以て炊屋姫皇后と以て皇統を嗣せ奉りて廿四代の帝王
 とあり奉る推古天皇とあり此時麻呂皇子と推古天皇の皇太子とありわ
 皇子固く辞しつゝも嘗て勅詔すいふ及び終つ皇太子と成りて天下乃
 万機と攝政しり。本朝女帝の位は又攝政の始是なり。此より世人聖徳太子
 と稱しり。程お太子天下の御政と独御必おのびなせり四海の民とらる
 内お神祇と尊し佛徳と讃嘆しり。風雨も順りて天下昇平なり。昔お勝
 昔お勝まより同三年五月高麗國の沙門惠慈來朝し頗る學業優深なり
 之やうて太子師として佛敎と學びり。同五年百濟國の王子阿佐來朝し太子
 小謁して偈と説て曰く敬禮大悲觀音菩薩。妙敎流通東方日國。四十九歳傳燈
 演説。大慈大悲敬禮菩薩と云。此は太子の眉間より白光と放つ。阿佐再拜
 して退出り。同六年戊午三月。膳大娘と以て外妃としり。太子御歳廿七歳是
 前推古帝未敏達天皇の皇后おてまはる。時皇女貝嬬姫と以て太子の正妃と

定めり。是は中つ膳の大娘と外妃と稱せり。同年夏四月太子諸國お名馬と求
 りて甲斐國より一匹の名馬と献じ一身墨とも思ひ四脚も白し驪駒ハ神
 馬なり。舎人調子磨とて養ひし。同年秋九月太子太子に打乗
 舎人調子磨と具せり。本宮と出さる。東國お赴くと東に向ひて馬を怒ら
 空お騰り雲と踏んで須臾のうちに富士の嶽に上りて夫も信濃と經て越の白山を
 登りて山岳峻峭と遙の下お見たり。四の蹄土と踏む始り終り至るまで恍惚と
 空中と行かや。之お依り東國北國の地理男女農業紡績の形勢と見たり。万民
 稼穡の苦と察し又諸國の險易或ハ調貢の遠近と知り。三日中を還らせり。
 群臣の程太子宮中お坐らせり。安き心なり。天皇も歡慮おゆる。渡せり。お
 所お還御しり。人々歡喜斜まら。太子有し事と詳らふ語らせり。群臣
 舌と巻て恐れし。太子ハ神不通と驚きし。高此のちも彼馬のちも出さる
 めい昔七還らせり。數回有し。其たびも彼馬雲とらんで空中お登り

調子曆書と取て同く雲中ふ駈て給ふるや。介後太子奏聞とて都の四方
四院と建立しなす。四院といふ敬田院施藥院療病院非田院あり

敬田院 出家小限らるる俗人あり戒律となら修行せんと思入 施藥院 一切の藥草とて

者と入られ法華經勝鬘經とほり講し 療病院 一切の男女親るる病者

各病と得て藥を用ひて治す 悲田院 老を子とて幼を父とて貧乏を富とて

師長とて者小命とて藥とあり 父母の子とて憐れむとて

同九年辛酉年。太子御歳三十ふる。大和國班鳩小宮と宮。此後らやたあ

是と班鳩宮と申。借此時まがら吾朝の曆の法も唯草木の花も葉の落も

見て以て農業と起り皇太子陽胡史王陳とら者と撰ひ。百洲國は

と作る術と習らるる王陳百洲國ふ止ると二年。沙門勸勒とらよめと師

学び大略と得るとと未其深淵及らるとり。勸勒と伴ひ飯朝を太子

献するに曆書天文地理の書あり。道方術の書と一覽あり。勸勒と解らる

れ如多うして太子速ふ解らるる恰も通達する人の如く却て勸勒の如く

夏遙らる。勸勒大驚驚き舌を巻て敬禮せり。是ら曆法吾朝を用ひらる

して偏小太子の御知らるる同十一年癸亥十月天皇小墾田の地都と過る

是と小墾田の宮 大和國高市郡 と申と此時三十二歳らる。諸又秦の河勝小命とて兵法

と講せらる。又河勝軍法十二道と編ら奉る同年十二月太子秦聞とて十二の冠階

と定めらる。十二階といふ。大徳小徳大仁小仁大禮小禮大信小信大義小義大智小智

是我國ふ於て位階と定めらる。始らる同十二年國家のなほ十七條の憲法と定めらる。

同十四年太子三十五歳ふ成らるる今年七月天皇太子と諸して勝鬘經と講せ

しりり太子袈裟と被塵尾と握御々の坐ふのけり經と講らる。講早つて天

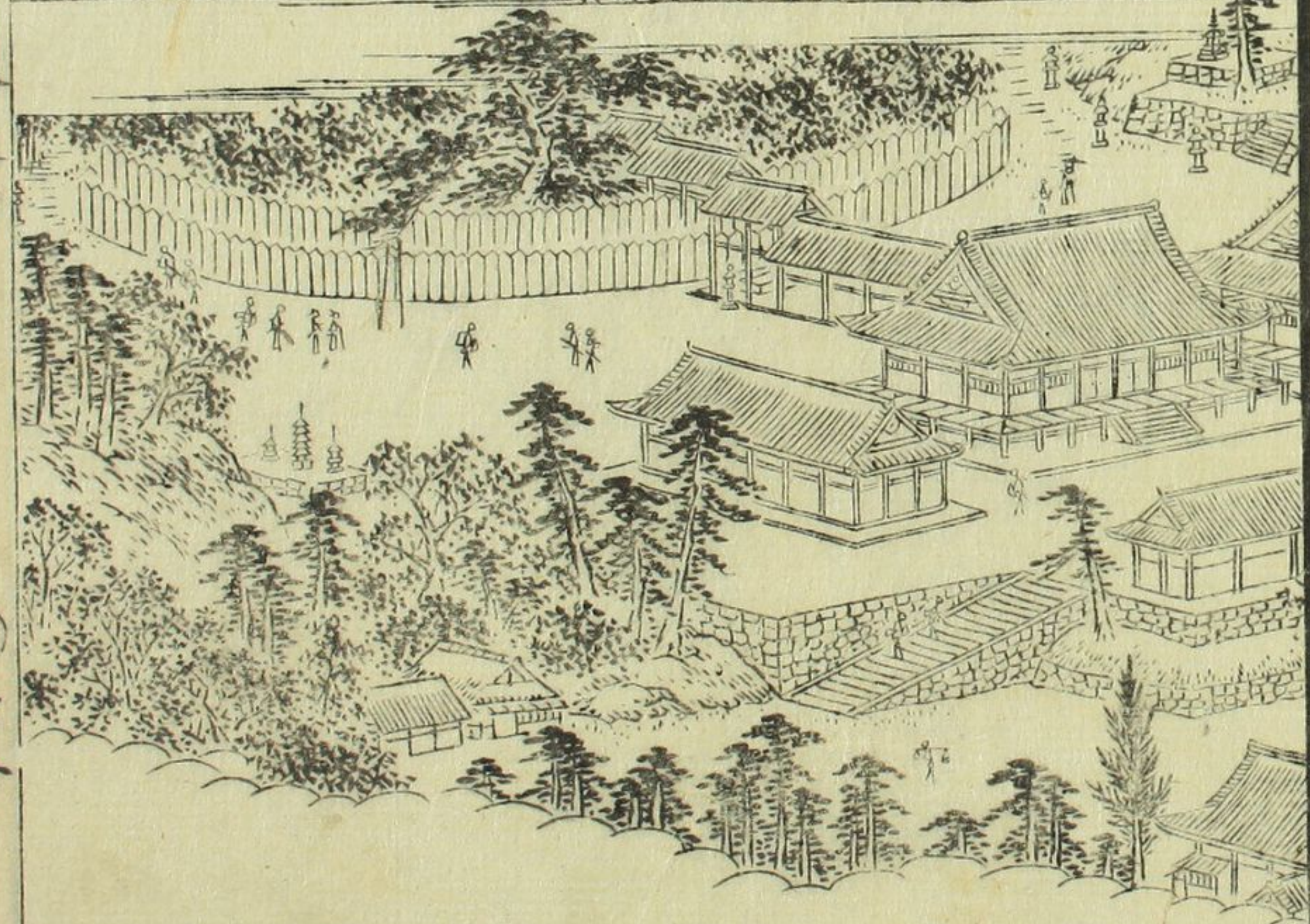
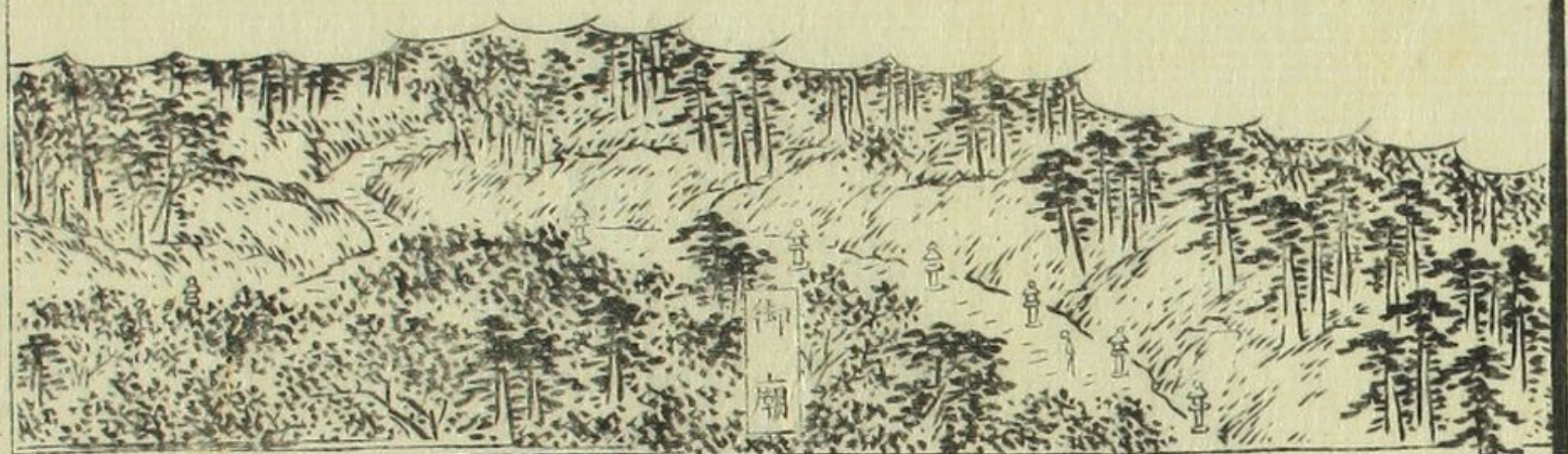
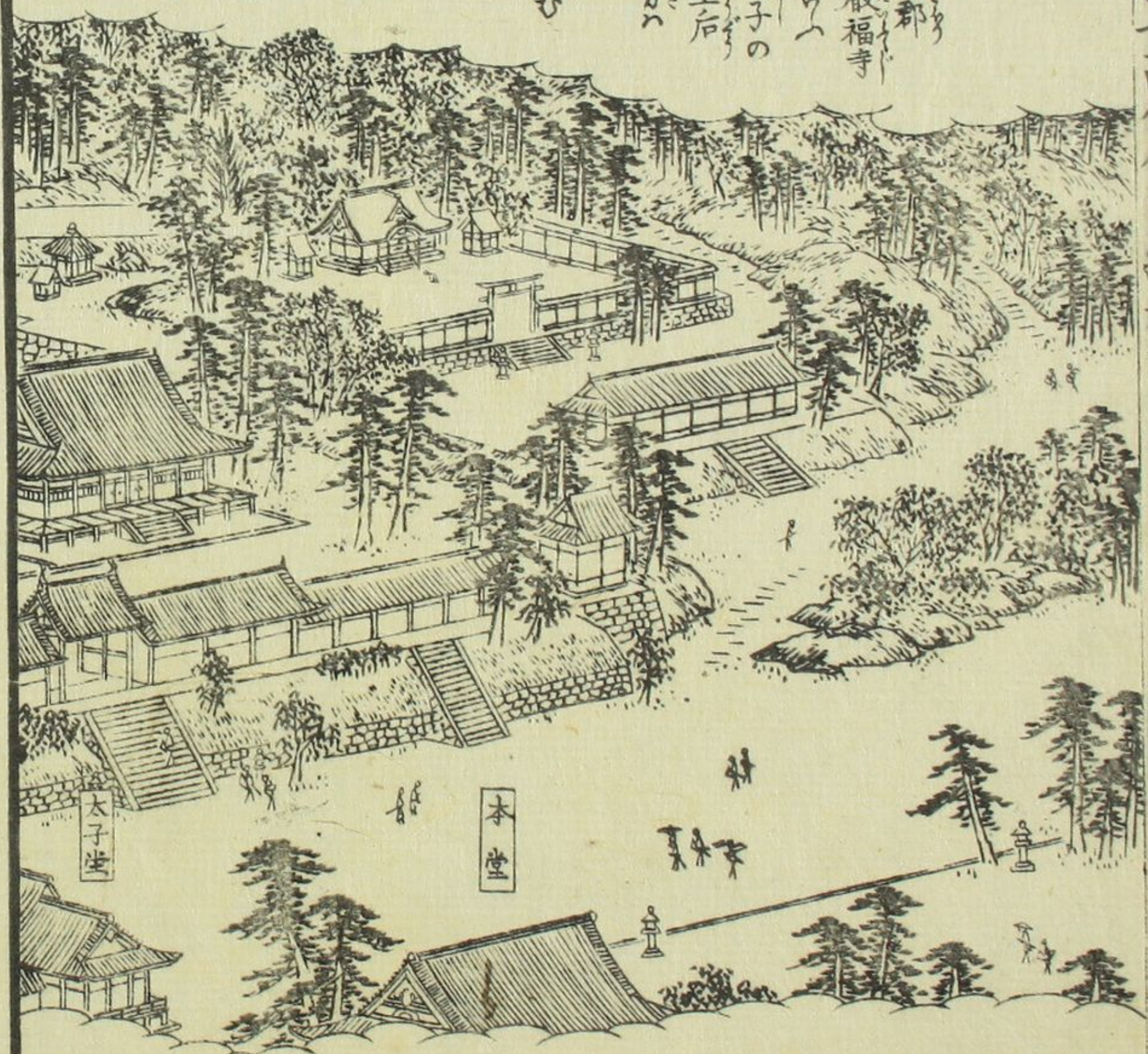
蓮華と雨は帝戲感斜らる。即らその地ふ伽藍と建立らる。同十月勸

法華經と岡本宮ふ於て講せらる。播州の莊田一萬畝とて施物とて太子納らる。

法隆寺の産らる。是年諸列小命とて池と掘渠と開き屯倉と置て以て凶年の

河内國科長
御墓の圖

御墓山ハ河内國石川郡
太子村ナリ磯長山祇福寺
ト号イ俗ナ上の太子ト云ハ
肅内ノ中央ニ皇太子ノ
御母穴徳部間ノ皇后
東ノ方ニ皇太子西ノ方ニ
太子ノ后 膳ノ大娘
都合三箇ノ石棺ト藏ヒ
故子三骨一瘞ト号イ



御衣の香ぐらと云限す。御屍の輕きと衣服とよりりも輕
 同廿日小河内國科長河内國石川郡科長山又ハ御墓山也の御墓稱今上の太子と号はるるを奉る。既子
 墓ニ命命去来命以来命土師連御墓と造り中子二の石の床と双今年正
 月成就命同二月小葬興と送り御墓小収り奉らるる。蓋てハ其期と知
 召れる故。誠小喪興と送り奉る光景命天子の乘輿と送り小齋
 大臣以下上御太子の御弟王子命の麻の鞋と召させの。前後左右小陪後
 各雜華と擎け諸の釋衆ハ梵明と讚命華と雨命奉る既小御葬の夏陽命
 遠迫の貴賤命巷命さ命。さ命喪服と着命香と焼声と放命哭命る天皇
 此世の限命と思命召命れ命。遙命高命登命遠命徹覽命御衣命只命管
 絞命御墓命小葬命奉命後命邊鄙命の民命い命ふ命未命集命五十余日の間
 毎日小御墓の周圍と巡命て悲命然命ふ平命愛命乘命甲斐命の驛馬命
 太子薨命れ命日命より悲鳴命と更命水草命と嚙命。葬命奉命る時命喪興命の左命方命

引命御墓命を連命棺命柩命と収命奉命時鳴命一色命即日忽命死命
 不思議命往昔命楚國命の項羽命が乘命乃命烏命錐命馬命ハ項羽命烏命江命陳命没命せし
 時悲命鳴命忽命水命中命死命や項羽命ハ所謂命暴惡命の將命たり。然命れ命も平命小馴命て
 愛命と蒙命し恩命と忘命れ命空命の死命と悲命て死命。况命や皇太子命ハ天下命の大仁命本朝命の
 聖人命也命畜類命と命也命。死命不命殉命以命參命ら命る命支誠命小感命ら命小堪命。又命此命時命
 奇異命カ命葬命奉命日命より五十日命づ命り命歷命。一命の異鳥命米命御墓命の上命小樓命て
 去命ら命その形命鵲命の命。毛色命白命諸人命何鳥命と云命と云命。鵲命鳥命の類命御墓命の邊命
 来命迫命時命遠命追命の命供物命の類命諸鳥命。神妙命守命ら命る命時命の命人命これと
 見て守墓鳥命と命三年命の後命何方命去命。曾命て再命来命ら命。今命の世命ハ空室命と独
 守命。寂莫命住居命と守墓鳥命と命此命由縁命と命。楮命又命高麗國命の僧命惠慈命法
 師命去命の二十三年命十月命小本國命小啼命。今命般命と命皇太子命の薨命由命
 大命悲命本國命の僧命と集命齊命と設命け命自ら命讀經命。左右命の人命誓命い命上宮太

子日本の聖人なり。斯る聖徳と具足して粟散邊鄙の小國に生れり。其の全く佛法と東土を知らず。權化の再生る。故に三寶と尊敬し。万民を救ひし。我異國に生るる。宿縁の深き所謂あり。彼國に暮らして朝暮教をうけ。断金の交りしや。我独生るる。天下の間。此後永く知音あり。我未年二月五日。太子遷化の周期あり。此日必死して必ず上宮太子と浄土に遭奉り。共ニ衆生と化度まじり。果して誓言に違ふ。翌年二月五日。齋戒沐浴。寂然殊勝して歿す。高麗の人の言ふ。上宮太子独聖なり。非は。惠慈も又聖なり。此事後我國に聞え。聽人數感。り。り。り。

三國七高僧傳圖會附録卷終

聖德皇太子廟内碑石偈

大慈大悲本誓願。愍念衆生如一子。是故方便從西方。誕生片州興正法。我身救世觀世音。定惠契女大勢至。生育我身大悲母。西方教主彌陀尊。真如真實本一體。一體現三同一身。片域化緣亦已盡。還歸西方我淨土。爲度末世諸衆生。父母所生血肉身。遺留勝地此廟窟。三骨一廟三尊位。過去七佛法輪所。大乘相應功德地。一度參詣離惡趣。決定往生極樂界。松子傳曰太子嘗入磯長廟内記偈于碑石松子倍從親見之云云

又天喜二年九月二十二日僧忠禪建塔於磯長廟側掘基得礪石二枚石上有文曰吾為利生出彼衡山入此日域降伏守屋之邪見終顯佛法之威德於處處造立四十六箇之伽藍化度一千三百餘僧尼製記法華勝鬘維摩等大乘義疏斷惡修善之道漸以滿足矣今年歲次辛巳河內國石川郡磯長里有一勝地尤足稱美故點墓所已畢吾入滅以後及四百三十餘歲此記文出現哉爾時國王大臣發起寺塔願求佛法耳此石現在磯長叡福寺世曰礪石識文具出叡福寺記

皇都書林西村空華堂藏版目錄

東六條下珠數屋町東洞院西五入

丁子屋九郎右衛門

教行信證	四	愚禿鈔義要	八	<small>親鸞聖人御傳鈔</small>	<small>上下二箱入</small>
同御自釋	一	同纂釋	四	同閉本	二
同六要鈔會本	十	同樹心錄	四	同小本	<small>并薄葉摺</small> 二
同義例	一	同模象記	六	同繪入	<small>平假名</small> 二
<small>淨土文類聚鈔合刻</small>		真宗聖教字箋	三	同照蒙記	<small>智空</small> 九
<small>愚禿鈔</small>	<small>一</small>	入出二門偈試解	一	同視聽記	<small>惠空</small> 六
入出二門偈	<small>三品入云</small>	同大意	一	同讀法	<small>小本</small> 一
同三品入	<small>小本薄葉</small> 一	同窺斑錄	三	本願寺御系圖	一
文類聚抄私記	七	同流情記	三	親鸞聖人略傳	<small>并常葉影像記</small> 一
同蹄泮記	四	同參考	二	同畧傳十六門記	一
同首書	一				

七祖聖教 <small>新版</small>	十一	十住毘婆沙論	五	同宗祖記	一
異譯三部經 <small>五存經</small>	四	易行品分科	一	往生要集	六
校異三部經 <small>大本</small>	三	同冠注	二	同和解	十
淨土三部鈔典 <small>小本</small>	一	同要津錄	三	同釋迂要	一
三部經私記 <small>教區</small>	三	同讀易行品	三	同首書	六
三部圖經頭書	三	淨土論大意	一	同指麾鈔	廿五
三部經鼓吹		往生論註	三	選擇集 <small>惠空点</small>	二
三部經略圖 <small>唐統</small>	一	同顯深義記	五	略論淨土義 <small>新版</small>	一
淨土三部經和訓 <small>折經</small>	四	安樂集	二	同首書	一
同三部經 <small>尺方寸付</small>	一	同首書	二	七高僧勸化鈔	七
同中形 <small>尺方寸付</small>	一	玄義分商量鈔	五	西方要次	一
同三部經 <small>尺方寸付</small>	一	稱讚淨土經駕說	四	同善惡因果經	一
同三部經 <small>尺方寸付</small>	一			同首書	一

諸本御草稿三帖和讚 <small>技合</small>	三	大乘法苑義林章	七	因明論大疏	四
同小本薄葉摺 <small>新版</small>	一	同科圖	二	同瑞源記	八
同首書	三	勝宗十句義論	一	同前後記	五
同註解	廿	同科註	一	同四種相違私記	四
同鼓吹 <small>一名</small>	七	同釋	一	同註釋	三
<small>此書ハ、假名ニテ三帖和讚全部ヲ講説シテ余ノ注書トハ違ヒ至テワカリ安ク宗侶ノ初心ハナクタヨリトナルヘキ書ナリ</small>		同決釋	五	畧述法相義	三
淨土和讚掌解	七	首七十五法名目	二	同補闕	一
正像末連環解	十	有宗七十五法記	三	同依釋	四
御文示珠指	九	三國佛法傳通錄起	一	天台佛心印記	一
法宗源	一	法宗源	一	同註	二
同明燈鈔	十五	淨土源流章	二	同註解	二
正信偈稱揚鈔	三	二十唯識論速記	三	同箋要講錄	二

龍舒淨土文 <small>王日休</small>	十	正信偈勸則 <small>前後</small>	六	法華諸品大意	一
<small>コノ書ハ往生人傳三十卷ヲノス 祖師御本書ニ御引用ノ書</small>		奉讚十二光弁	三	科十不二門	一
眞宗名目圖	二	淨土和讚并述編	五	華嚴金師子章	一
同 小本 并薄葉摺	二	同 即席法談 <small>四十八首</small>	三	遊心安樂道 <small>合</small>	一
八宗綱要	二	同 大經讚 <small>廿二首</small>	三	因果物語 <small>百六十一</small>	三
同 校訂 新版	二	同 觀小讚 <small>十四首</small>	三	<small>此書ハ今世ニ現當アル處ノ 因果ノ入蘇マツタル書ナリ</small>	
樂邦文類	五	高僧和讚開導 <small>前後</small>	六	袖珍勸考	小本 一
存覺上人二期記	三	同 寫瓶錄 <small>中本</small>	二	袖珍勸錄	小本 一
雜修十三失合釋 <small>片夕</small>	二	正像末可說	五	眞宗一塵法談	小本 一
愚迷發心集 <small>行カナ</small>	一	述懷和讚勸化鈔	十	月のおるる <small>小本</small>	一
<small>此書ハ解脫上人ノ述述ニテ無常形 勢ヲアラハシムル長三ノ大書ナリ</small>		現世利益和讚勸導 <small>中本</small>	三	見僧唱導 <small>選 中本</small>	二
妻 鏡 <small>無住和尚述</small>	一	同 後編 <small>道名出来</small>	三	<small>右ノ書ハ眞宗ノ初心ノ見僧 法談ノ礎トナルヘキ書ナリ</small>	

興御書鈔	一	御文睡眠錄	三	勸化因縁并談集	三
同 諺解 <small>平カク</small>	一	同 高頭錄	三	<small>勸化 西方</small> 深信釋法談	二
同 述讚	二	同 後講錄	三	二河白道護信錄 <small>前後</small>	六
同 勸化燕滯錄	二	同 末代无智醫訓	三	十四行偈開華苑	三
式歎徳文分科 <small>小本</small>	一	同 白骨拾穗抄	三	<small>和哥 目録</small> 勸化世支談	三
式文勸化述讚	四	大經悲化章演義	二	一枚起請説叢	三
式文勸化淘汰鈔	五	同 善惡業道談	五	三文一録八十余座	三
<small>コノ書ハ式文ノ全意ヲ解并 シテ一部ノ要ロラカス</small>		同 三誓偈宣唱錄 <small>新版 中本</small>	三	帳中五十座法談	二
歎徳文鈔	三	同 後編 <small>道名出来</small>	三	卷懐五十坐法談	二
同 文意	一	同 四十八願映鈔	十	改悔文便導	二
同 勸化鈔	五	阿弥施經依正談	六		
<small>コノ書嘆徳文全部ノ真意 大意詳カニ并説セリ</small>		開華法話	一		

无章无假名薄用摺	御和讚 <small>寸珍本 大形本</small>	真宗九表記 <small>行カナ 三</small>	大經會疏
右各正信偶公佛獨文集入 但與恩講和讚其外偈文 増減按摺御所持ノ御勝 年次第并注文可被下假事	懷玉御和讚 <small>横考者 行カナ</small>	真宗傳燈錄 <small>行カナ 三</small>	同嘉祥疏
校正御和讚 <small>中本 行カナ</small>	大谷遺法纂要	真宗遺文集要	阿弥陀經科
コノ御和讚ハ道來ノ御堂衆 休成師フシテ授心シテ世三流 布ス実ニ懷山便利ハ申ニ及父 カナフレホニイタル近久シキ故 初心ニ誓古ニ甚調法ナリ 右二本トモ薄用摺出来	真宗遺文集要	釋教玉林和尚集 <small>中本</small>	同通贊流
懷審御和讚 <small>中本 行カナ</small>	宗要文 <small>惠空 行カナ</small>	名僧諸家ノ釈教ノ母アリ ヲ書元祖祖師蓮師ヲ始テ諸 名僧諸家ノ釈教ノ母アリ	同義集
夏ノ御消息 <small>行カナ 御俗姓改悔文</small>	感嘆抄 <small>同</small>	小僧指南集 <small>同 行カナ</small>	同隱頭記
諸神本懷集 <small>元祖 二</small>	小僧指南集 <small>同 行カナ</small>	右真宗ノ勤行法談習學等 心得ヲ記僧侶初學必用ノ書ニ	同元照流
	同聖淨史	往生大要鈔 <small>平 二</small>	專修念佛問答 <small>二</small>

親鸞聖人御法話 <small>行カナ 二</small>	譬喻鈔 <small>行カナ 二</small>	帖外聖教 <small>行カナ 十</small>
同 血脉文集 <small>今 一</small>	他力領解鈔 <small>惠空 二</small>	真宗大經御消息 <small>一向歸西抄 真宗教化抄 南無之尺 三信三心同一事 全道抄 難易分別抄 總解記 聖道淨土名目 眞宗用意 并述名体抄 信心抄 唯信抄 歸命十ヶ条 本願相應集 法門見聞抄 一念發起抄 女人教化抄 眞宗教要抄 實教</small>
同 續 綱 <small>一</small>	作業持制鈔 <small>同 二</small>	眞宗教要抄 <small>實教</small>
右ノ書ハ祖師聖人御在世ノ 御弟弟子方へ御直ノ御教化ヲ 其終ウツシオカレシ大切ノ書ニテ 信心ノ骨目末世ハ失安心ノ龜鑑	專修專念鈔 <small>同 二</small>	眞宗教要抄 <small>實教</small>
實怡記拾遺 <small>蓮如上人 御法話去 二</small>	安心消息 <small>同 二</small>	眞宗教要抄 <small>實教</small>
實如上人実教 <small>行カナ 赤尾道宗并子条 合本 一</small>	叢林集 <small>惠空 行カナ 十一</small>	眞宗教要抄 <small>實教</small>
眞宗教要鈔 <small>行カナ 二</small>	此書ハ三經并文ヲハシテ其外 法門ノ要義眞宗ノ故實 行義等ヲノス曾テ眞宗 ノ僧侶平世坐右必用ノ書ニ	眞宗教要抄 <small>實教</small>
女人教化集 <small>今 二</small>	安心決定鈔 <small>行カナ 二</small>	眞宗教要抄 <small>實教</small>
一念發起鈔 <small>今 一</small>	同 評釋 <small>二</small>	眞宗教要抄 <small>實教</small>
右ノ書ハイソシモ善知識方ノ御 教化ニテ今ノ世ノ人ノ可ニ信存ス	馬療攝要	眞宗教要抄 <small>實教</small>
	馬療治調法記	眞宗教要抄 <small>實教</small>
	牛療治調法記	眞宗教要抄 <small>實教</small>
	牛料撮要	眞宗教要抄 <small>實教</small>
	馬療治調法記	眞宗教要抄 <small>實教</small>
	馬療攝要	眞宗教要抄 <small>實教</small>
	日用馬療医便	眞宗教要抄 <small>實教</small>

正信偈繪抄 <small>平入</small>	二	相續心得 <small>平入</small>	一	御文五帖 <small>平入</small>	十五
四十八首繪抄 <small>同</small>	三	同續篇 <small>女人教誡の部</small>	一	廿四輩道 <small>三本</small>	一
浄土和讃繪抄 <small>同</small>	二	念佛行者十用心 <small>平入</small>	一	同參詣記 <small>横本</small>	一
現世利益和讃繪抄 <small>同</small>	二	空の書 <small>佛大い子の後とすりうに義五多いんかこして成と傳</small>	一	同順拜圖會 <small>平入</small>	十
高僧和讃繪抄 <small>同</small>	二	和明清九郎傳 <small>平入</small>	五	眞宗故實 <small>要抄</small>	二
正像末和讃繪抄 <small>同</small>	二	山二河白道繪抄 <small>同</small>	一	眞宗心傳 <small>平入</small>	四
十四行偈繪抄 <small>同</small>	二	妙好人傳初編 <small>二</small>	二	四十八願圖會 <small>平入</small>	五
安心決定抄繪抄 <small>同</small>	二	同 <small>二編二三編二</small>	二	親鸞聖人繪詞傳 <small>三</small>	三
興御書繪抄 <small>同</small>	二	同 <small>四編二五編二</small>	二	同 <small>十徳傳</small>	二
五日宮御遺狀記 <small>同</small>	一	親鸞聖人繪詞傳 <small>三</small>	三	同 <small>十徳傳</small>	二
一投起請文繪抄 <small>同</small>	一	同 <small>十徳傳</small>	二	此書の聖人の御遺狀と傳書	一
極樂道中獨業 <small>同</small>	一	祖師の御遺狀と傳書	一		

明治十二年
卯一月新調

長里殿町
柳本南衛

正信偈訓讀圖繪 <small>五</small>	五	親鸞聖人御一生記繪抄 <small>三</small>	三	文類正信偈 <small>數佛偈</small>	小本一
茶店問合 <small>平入</small>	三	同 <small>一代圖會</small>	五	十四行偈 <small>三巻</small>	四巻
三國七高僧傳圖會 <small>平入</small>	六	他力念佛九能書 <small>一</small>	一	行者參詣心得 <small>小本</small>	一
功德大宝 <small>平入</small>	六	大谷 <small>六巻</small>	一	内佛 <small>御き</small>	小本一
御本山并御學寮		御書物所		子屋九郎右衛門	

御書物所
子屋九郎右衛門

